

門川町文化財調査報告書第1集

江 田 城 跡

加草～枝橋線道路改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



1993年3月

宮崎県門川町教育委員会

江田城跡

加草～枝橋線道路改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



1993年3月

宮崎県門川町教育委員会

序

この報告書は、町道加草～枝橋線道路改良事業に伴って実施した江田城跡発掘調査の記録であります。

門川町には、数多くの文化財が残されており、城跡も今回調査をいたしました江田城跡をはじめとして門川城、松尾城、佐々宇津城などがあり、まだまだ名も知れぬ多くの城跡が草深くかくされているといわれるところもあります。

今回、江田城跡発掘調査によって、門川町の歴史の一端を知る上で貴重な資料が得られたことは大変喜ばしいことであります。

これからも、今回のような各種の開発によって町内の文化財を調査するというようなことが増えてくると思われますが、関係者相互の理解と協力によって文化財の保護と地域開発が円滑に行なわれていくことを願うものです。

江田城跡は、ごく一部の発掘調査でしたが、今後、城の中心部分の性格や規模を明らかにしていくための足がかりとなるものであり、門川町の中世山城のあり方を知る上での貴重な第一歩となったと思います。広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際してご理解とご協力をいただいた門川町の関係各課の皆さんはじめ、工事関係者の皆さん並びに地元関係者の方々に対し、心から感謝申し上げます。

平成5年3月

門川町教育委員会

教育長 松 田 寿 典

例　　言

1. 本書は、加草～枝橋線道路改良事業に伴う江田城跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、門川町長の依頼を受けて、門川町教育委員会が主体となり、平成4年10月19日から12月1日まで行った。
3. 調査組織は、次のとおりである。

調査主体　門川町教育委員会

調査責任者　門川町教育長　松田　壽典

調査事務局　門川町教育委員会

社会教育課　課長　安藤　楓松

〃　課長補佐　井川　邦人

〃　係長　太田　民雄

〃　主査　高橋　栄一

〃　主査　野島　ふみ子

調査担当者　〃　主事　窪田　麗子

調査作業員　園田嘉男、中田嘉蔵、岩切恒義、甲斐ツイ子、津島サカエ、園田ヒサ子、
請関スミ子、松林トミノ、白木キワ子、平田笛美、(以上 加草、中村の皆さん、順不同)

池田正広、浜松慶治、富田三次、吉田　正、竹田トミ子、長友サトノ(以上
松沢建設の皆さん、順不同)

整理作業員　園田ヒサ子、請関スミ子

4. 本書掲載の写真は、航空写真については㈱スカイサーベイに委託し、その他の遺構、調査時の写真については窪田が、遺物については、教育総務課 甲斐勝美が撮影した。
5. 本書掲載の図面は、A地区遺構平面実測図、B地区平面実測図については、㈲白木測量に一部を委託し、その他の遺構、遺物については、窪田が実測を行った。
6. 付録の江田城地形図は、平成3年度に㈱朝日航洋に委託して作成した $\frac{1}{200}$ の地形図をベースにして作成している。
7. 土器の色調は、農林水産省農林水産技術会事務局監修の新版標準土色帖によった。
8. 方位はすべて磁北を用い、レベルは海拔絶対高である。
9. 本遺跡の発掘調査及び報告書作成にあたっては、千田嘉博氏(国立歴史民俗博物館)、北郷泰道氏、谷口武範氏(宮崎県文化課)、その他宮崎県市町村文化財担当諸氏の指導、助言をいただいた。
10. 本書の執筆、編集は窪田が行った。
11. 本遺跡出土の遺物および調査記録、図面、写真是門川町教育委員会において整理保管している。

本文目次

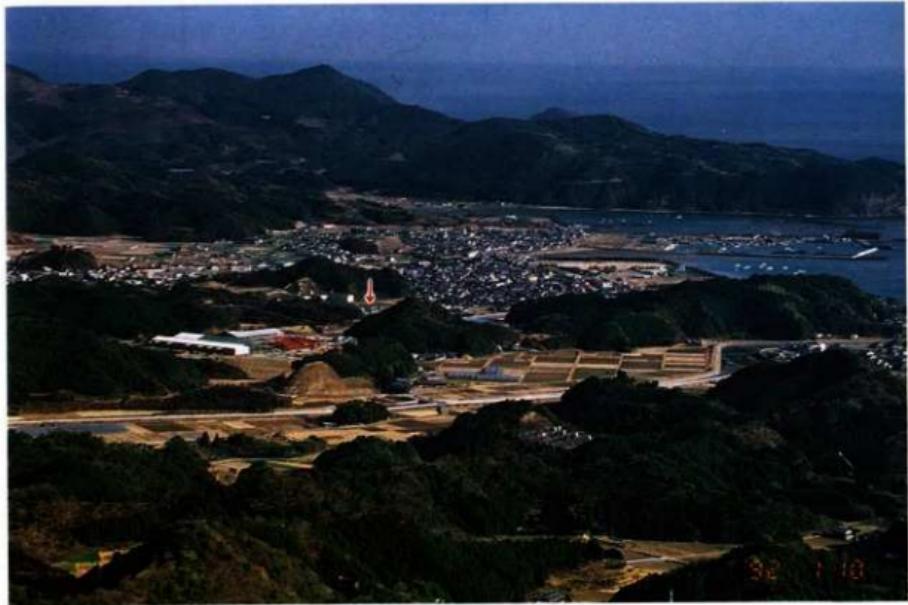
| | |
|--------------------------|----|
| I、遺跡の立地と歴史的環境(城の動向を主として) | 3 |
| II、調査に至る経緯 | 9 |
| III、調査の経過(調査日誌抄) | 10 |
| IV、調査の記録 | 13 |
| 1. A地区 | 13 |
| ①横堀 | 13 |
| ②土層 | 15 |
| 2. B地区 | 17 |
| ①第1号土塁 | 17 |
| ②第2号土塁 | 17 |
| ③第3号土塁 | 17 |
| ④第4号土塁 | 17 |
| ⑤第5号土塁 | 20 |
| ⑥第6号土塁 | 20 |
| 3. B地区出土の遺物 | 20 |
| ①瓦 | 20 |
| ②土師質土器 | 20 |
| ③陶器 | 20 |
| ④青磁器 | 22 |
| 4. C地区、D地区 | 22 |
| 5. 小結 | 23 |
| 6. 参考資料 | 24 |
| 1. 門川城縄張り図 | 24 |
| 2. 新城縄張り図 | 25 |
| V、まとめ | 26 |

挿図目次

| | |
|---------------------------------|----|
| 第1図 江田城跡の位置と周辺の城跡 | 2 |
| 第2図 発掘調査地点と周辺の地形 | 12 |
| 第3図 A地区横堀平面実測図(右折込み) | 14 |
| 第4図 横堀土層断面図 | 15 |
| 第5図 B地区平面実測図 | 16 |
| 第6図 B地区遺構実測図(用途不明土塙) | 18 |
| 第7図 B地区遺物出土状況 | 19 |
| 第8図 B地区出土遺物実測図($\frac{1}{2}$) | 21 |
| 第9図 門川城縄張り図 | 24 |
| 第10図 新城縄張り図 | 25 |
| 附録 江田城地形図(縄張り) $\frac{1}{400}$ | |

図版目次

| | |
|-----------------------|--|
| 図版1 ①江田城全景(南より) | |
| ② 同 近景(北西より) | |
| ③発掘調査地点全景(北より) | |
| ④ 同 (北西上空より) | |
| ⑤A地区(横堀) | |
| ⑥B地区 | |
| 図版2 A地区全景(横堀検出状況) | |
| 図版3 ①A地区発掘前 | |
| ②同左 近景 | |
| ③A地区発掘後 | |
| ④同左 遠景 | |
| ⑤A地区調査風景 | |
| ⑥B地区調査風景 | |
| ⑦C地区調査風景 | |
| ⑧D地区石塔群 | |
| 図版4 A地区横断面(西から見る) | |
| 図版5 B地区全景(用途不明土塙検出状況) | |
| 図版6 B地区遺構検出状況 | |
| 図版7 B地区遺物出土状況 | |
| 図版8 B地区出土遺物 | |



遺 跡 全 景



第1図 江田城跡の位置と周辺の城跡

I、遺跡の立地と歴史的環境（城の動向を主として）

江田城跡は、宮崎県東臼杵郡門川町大字加草字海田2012番地～大字加草字迫の前2023番地に所在する。門川町北部と延岡市南西部の山地からびる細長い丘陵に沿って江田城、松尾城、佐々宇津城が立地している。江田城跡と佐々宇津城跡は、町北部山地の塩屋ヶ内から出た丸山川と元山（本山）から発する鳴子川にはさまれた迫田にのびている丘陵上にある。同じ丘陵がのびて海と出会う先端に現在の永願寺がある。

この永願寺は、明治28年に現在地に移転されたのであるが、それ以前は鳴子川を逆のぼった丘陵のつけ根に位置する中村地区受に所在していた。「日向地誌」の記録によると明治時代には眞言宗淨善院（岡富善龍寺）の末派となっている。寺には、現在、古文書などは残されていないというが、口碑によるとその由来は「淳和天皇五十三代嘉祥元年、五月、江田の城主草野大膳弘利民部安弘公の四海安穩祈願のため建立、能円了好和尚により門山された」という。眞言宗西京仁和寺末派であり、吉祥山永願寺として十二坊があり、山岳眞言密教の巣山として繁栄したという。昭和60年に門川町有形文化財に指定した薬師如来像は行基の作と伝えている。江田城主として伝える草野大膳弘利、民部安弘という人物がどういう人なのか不明である。

江田城は、主郭と思われる地点が頂上にあり、その丘陵に沿って北西に堀切をはさんでやや広い曲輪が存在する。北東や南東にのびる丘陵に沿っては、曲輪が連続し、北東にのびる丘陵はさらに2つに分かれしていくが、そのうち西側の小丘陵のつけ根に堀切があり、堀切より下の斜面が何段にも切られ、テラス状になっている。

城の北側は小字で海田（うみた）と称し、現在は公園墓地となっている松尾城跡の西側から谷筋にのびるせまい水田地の一部は〔ヤシキガウチ〕と呼ばれている。またそれより奥の水田の中央に自然石を積み上げた塚があり、〔シオガマサマ〕といって祀っており、耕作に際しても手をつけないようにしている。石の中には、すり石状の丸石もみられた。

江田城と佐々宇津城をつなぐ丘陵に堀切があり、鳴子川の北側に広がる水田と「海田」をつなぐ農道が通っている。これを〔梅田の堀割〕といい、江戸時代末期に和七という石工が海田に水を引くために掘ったという用水トンネルがある。この堀切の上に供養碑が立っている。その堀切の南西側から北西にのびる道沿いの集落と江田城の丘陵の南西側を含む地域を枝（えだ）といっている。行政区としては、加草区に属している。

加草は、昭和10年の門川町政施行以前は加草村であり、現門川町に含まれる門川村、川内村、庵川村と同じく、縣（あがた）土持氏の支配地であった。門川のはじめは、延長五年（927）に成立した「延喜式」に記述されている日向十六駅のうち「刈田（かりた、

かった」と称される駅が存在したのが「門川」であるとされ、「和名類聚抄」〔承平五年（935）成立〕によって（日向国に五郡があり、そのうち臼杵郡に刈田とある）のが「刈田駅」の所在地とされている。現在の「門川（かどがわ）」の呼び方は「刈田川（かたがわ）」の転訛である説や「門川」は古くは「門河」と書いたので、その草書を「刈田」と誤読し、呼び方に間わりなく、文書上「刈田」と書き写されたという説、町内に「カギ田」という小字があるが、それに由来する等、諸説がある。

過去に字カギ田においては道路工事中に壺一個、蓋坏一個、小形坏一個が発見された例がある。^{第5} また字コモダに横穴3基、下納屋に円墳があった。^{第6} いづれも市街地や住宅地となり、出土地点は不明となっている。今のところ町内において古代「駅」に關係するような遺跡は確認できていない。

前述の「延喜式」によると、日向国の駅は、県北においては「長井」、「川辺」、「刈田」、「美瀬」がある。長井は北川町に地名が残り、川辺は延岡市の西階に地名として残っている。各駅間の里程は約4里というが、川辺から4里というと門川しかなく、このことからも「刈田」は「門川」であるといえる。

刈田駅設置のころ、天平勝宝二年（750）社壇の本に八幡宮を起したことが門川神社の縁起にみえる。^{第8} この八幡宮が康正元年（1455）に加草村と門川尾末村の境に遷宮し、門川村一の宮八幡宮（俗に江田八幡）となった。社壇の本は、西門川地区の三ヶ瀬の神舞^{さんぎ}から登る鍵山頂付近にあり、「ごりんがでら=五輪ヶ平」と呼ばれている地点に所在していた。戦後、鉱石の採掘が行なわれていたらしいが、五輪塔などが残り、石斧なども表探されたと聞く。

「門川」そのものの名称は、土持氏との関わりによってあらわれてくる。「宇佐大鏡」によると、11世紀半ば海宿権為隆という人物が日向国司であったとき、宇佐八幡に寄進して開創したという「富田莊」^{第11} が成立した。この富田莊は、現在の門川町、日向市の日知屋、細島、富高、塙見、財光寺を含む地域であったようだが、町内中山神社の縁起に「富田性門川村……」^{第12} とあり、さらに愛宕神社（門川神社）所蔵の棟札の記述にも近世まで「富田庄」の地名を伝えていたことが知られている。富田莊成立後、平安時代末期に土持氏とこの地方の関わりが始まったとみられ、平安時代末期（12世紀初頭）、土持信村が臼杵郡司となり、その弟信綱の子、宗綱が諸県大夫、則綱が門川七郎を名乗ったとされる。

鎌倉時代になると、「富田莊」は伊東氏の祖である工藤祐経が支配していた。このころの県北（臼杵郡）は、土持氏をはじめ中原氏、島津氏、宇佐氏、藤原氏（工藤氏=伊東氏）

などに分かれて支配されていたが、平安時代から土持氏の所領であった県、富田、田島、諸県などが伊東氏の所領ということになった。しかし、伊東氏の初代祐経はもちろん、二代祐時までは直接日向に下向することはなかった。13世紀半ば、祐時の時代にその子等を日向の領地にそれぞれ派遣し、七男祐景が「富田庄」と「県庄」を領して「門川殿」^{※14}と呼ばれた。その後、この子孫が十三族に分かれ、佐々宇津氏、小松氏、日知屋氏、宮崎氏、曾井氏、飯田氏、清武氏、山之城氏、平賀氏、石塚氏、池尻氏、穆高（むかさ）氏、村角氏となり、いわゆる「門川党」となったという。このうち佐々宇津氏、小松氏に関わりのある佐々宇津（左惣津）、小松の地名が町内に現在も残っている。

佐々宇津は、「日向記」卷四にある「門河退治並祐吉早世事」の中に城として「本城、鳥越、^{いのせ}狗山、^{いぬやま}佐々宇津」として現われる。また町内加草の古老が、加草のことを（サソウヅ）と呼んでおり、中山神社の縁起の中にも江田城東側の丘地にある若宮神社のことを「左惣津若宮大明神」と言っていたことが知られている。「小松」については西門川に向かう五十鈴川沿いの県道に接する山間部に（小松）という地区があり、板碑や巨大な五輪塔などがまとまって残っている。地元の人は（ニチレンヤボ=日蓮ヤブ）と呼んでいたが、ここを門川氏か小松氏に關係のある墓所ではないかという説もある。板碑としては文明五年（1473）のものと大永七年（1527）のものが紀年銘が判読できる。日向市の定善寺文書の中の享禄四年（1531）「福永祐尚奉安堵状」に（「門河」内の「小松寺」と「大原寺」が定善寺の末寺であることを從前のように認める）といったことが記されている。^{※15} この「門河」の地名がいつから現われるかはっきりしないが、予章館文書の「土田帳写」弘治二年（1556）には、「門河 朱云 近江守かくこ 江田八幡領」「門河卅町之内……」「門河 あわノ守かくこ 江田八幡領」「門河十町……」などの記述がみられる。^{※16} このほか同資料には、「いを郷」（庵川か？）、「角佐」（加草）の地名も見える。

室町、南北朝時代には、日向国も南朝と北朝にわかれての戦乱に巻き込まれるが、土持氏、伊東氏共に北朝側について日向国内での勢力を伸ばした。伊東氏本家も祐持の時に日向に下向して、都於郡を本拠としてその後の日向国支配の足がかりとした。門川の佐々宇津氏、小松氏もそれぞれ穗北、新田を与えられて本拠地を児湯郡の方に移していくようである。このころ江田城主として永願寺に伝承されている草野氏の一族がこの地方に一時勢力をのばしていたことが知られる。「阿蘇文書」に恵良氏の一族、草野注記證^{※17} 築が恩賞のために塩見富高郷を所望し与えられたということが見える。^{※18} [正平二年（1347）]しかし門川地方の支配者として草野氏はそう長く留まってはいなかつたと思われ、現在に伝わる江田城跡の主も草野氏ではなさそうである。

中世の門川地方は、土持氏、伊東氏、島津氏の領地争いの渦中にあり、支配者の動向も複雑であつたらしく不明な点が多い。町内にはこのころの城跡が多く、古文書に現われる城がどれであるのか決めるのは簡単ではない。「日向記」によれば、文安二年（1445）に「土持氏の同意を得て」伊東氏から退治された「門河」の城主がいる。また先に述べた「門河退治並祐吉早世事」〔天文四年（1535）〕で、（門川の城主が野心を企て県の土持氏に注進し、多数兵をひき入れたので、伊東氏の諸侍がかけつけたが、この城が非常に難所でせめにくく、敵城は四ヶ所で本城、鳥越、狗山、佐々宇津の要害を手堅く構えていた）ことが記されている。文安二年の城主と天文四年の城主が同じ一族であったかどうか、石川恒太郎氏は「門川町史」において、文安二年の門河の城主は「小松氏」ではなかったかとされている。しかしなぜ「土持氏の同意を得て」退治なのか疑問が残る。

この時期、門川の含まれる富田庄は伊東氏の所領である。それともまだ実質的な支配関係として土持氏の影響が根強くあったのだろうか。また天文四年の城主について同じく石川氏は「門川町史」において「本城」を現在、城屋敷地区にある門川城（別名狗山城）に比定し、四ヶ所の城とは、現在の城跡では、門川城、江田城、松尾城、佐々宇津城としている。しかし、それでは門川城は別名を狗山城と呼ばれているのであるから、「日向記」記述の城にあててみると「本城（門川城=狗山城）、鳥越、狗山、佐々宇津」ということになり、同じ城が2度出てきてしまうことになる。

かねてから、この「本城」はどこであろうかと考えていたが、この度の江田城跡の調査にあたって地元のお年寄りなどから聞いたところによると、鳥越という名は松尾城かそれより東の山陵のようで、松尾城のことと考えてもさしつかえないようである。「日向記」の四ヶ所の城は狗山以外は加草の城である。従って「本城」という名は「江田城」ではないかという気がしてきている。また今回の調査に関連して町内の城跡数ヶ所を現地調査した際、五十鈴川南岸の日向市と門川にまたがる山地（字新城）で新たに城跡を見つけた。^{※20}かなり広範囲に厳重な防備の施設をもつこの城（仮に新城と名づけた）が「本城」であることも考えられる。どちらにしても15世紀後半から16世紀はじめにかけての一時期の門川地方の支配者は、伊東氏にとって危うい存在であり、土持氏と深い関わりのある一族ではなかったかと考えられる。

16世紀後半〔永禄十一年（1568）以降〕、伊東氏の勢力は日向国をほぼ手中にし、いわゆる伊東四十八城の布陣が成立した。このころ門河城主は米良四郎右衛門尉である。米良氏が門川にはいった年代については明らかでない。中山神社の縁記に文明年中に門川が伊東氏の領分となり、狗山城（門川城）に米良近江守藤原祐通が居城し、次に米良四

郎右衛門祐次の二代が居城したとの記述がある。天保七年（1836）、久四郎という人物が書いた覚書きが、城屋敷地区の米良家に伝わっているが、それには「城主傳書 日向臼杵郡延岡門河国主 虎山城主壹代 近江四良左衛門 同貳代目 米良近江守 同三代目 米良右近守」とある。伝承によると門川城主は米良四郎左衛門（四郎左衛）といふ人物であったということになっているよう、町内のお年寄りに聞くとたいてい「四郎左衛」といわれる。また米良氏の菩提寺であった土橋の法泉寺に伝わる由緒によると、（米良近江守の戒名は福寿寺殿法屋泉大居士、子息の四郎右衛門尉は月泉聖円禅定門）とあって、〔法泉寺十代堅香首座は天正六年（1578）米良四郎右衛門に同道して戦場におもむき、^{*22}高城陣にて戦死したこと〕などが記されている。伝承や縁起、由緒などには誇張や誤びゆうも多いのですべてについて信頼することはできないが、門川城（狗山城）に文明年間から天正六年まで二～三代にわたって米良氏が居城したことは間違いない。特に米良四郎右衛門（四郎左衛）という人物が、民衆に強く支持される要因があったようで門川の米良氏の中心的な人物として記憶にとどめられているようである。

門川城は、伊東氏の土持氏、島津氏に対する最前線として戦いに終始していたが、天正六年、伊東氏は島津氏の戦いに破れ、大分へ逃げのびた。結果、島津氏の支配するところとなる。その際米良四郎右衛門尉は、塩見城主、山陰城主と共に、大友氏を迎えて、日向国内の伊東氏勢力の回復を計ったことで知られている。そのころに米良四郎右衛門へ宛てて出されたとみられる大友義統の書簡が「日向記」の中に記載されている。天正六年四月に至って大友軍は日向に入り、延岡松尾城の土持親成を落とし臼杵郡を手中にする。門川の米良氏は大友氏と共に南に出陣し、島津氏に対することとなり、同年十一月の高城の戦いで戦死する。この戦いを含めた一連の戦闘（俗に言う耳川の戦い）で大友氏は敗退し、完全に日向国は島津氏の領地となる。この時の米良氏の活躍が後世に米良四郎右衛門＝四郎左衛の記憶を強くしているようである。

門川城の様子は、以上のようなであったが、この時期の江田城をはじめとする加草の城の様子はどうだったのであろうか。古文書などには耳川の戦いのころのこれらの城に言及したものには今のところ接していない。門川地方が伊東氏の領地となり、門川城に米良氏が入って後は、それらの城は廃城となったとも考えられる。しかし、永願寺に伝わる口碑の中で、永願寺が大友宗麟の大軍にせめられたが寺僧らの必死の防戦により遂に大友軍は退散したとされている。また江戸時代に高橋氏が延岡に入封したことだが、高千穂の三田井氏を滅ぼした時、これに抗議した加草の支配層であった一族の主人等が、高橋氏によって討たれたという話しが伝わっており、また近世にいたってのことだが門

川周辺の寺社は永願寺も含めて延岡の県神社（土持家）の支配下にあったという。このことは、平安時代以来の宇佐八幡領であった富田荘と土持氏との連絡とつながる関わりを想起させる。^{※25}

加草地方は、各時代を通じて土持氏との支配関係を強固に持ち続けていた土地だったようである。この耳川の戦いのころも江田城を含む加草の各城は土持氏の城であったと考えてよいだろう。今回の調査によって16世紀ごろの遺物が出土しているが、土持氏に関わる？勢力が城に居たことが想像される。

門川は江戸時代に至るまで、大勢力の前線として支配者が何度も入れ替わる地域であった。そのため支配者が明らかでない時期も多く、大変複雑な支配関係を呈している。民衆レベルではもっとどろどろとした関係があることが伝承、伝説によって知れる。門川の城についてはわかっていないことばかりだが、今後この江田城跡の調査を発端として研究がすすめられていくことを期待している。

※ 注記

1. 正面に「供養碑 石屋和七」とあり、横に「享和三癸亥天」の紀年銘がある。庄屋園田喜平治らの名が刻まれている
2. 日高次吉氏「宮崎県の歴史」による。
3. 石川恒太郎氏「門川町史」による。
4. 平屋尚俊氏（延岡南小学校教諭）の教示による。
5. 「門川町史」に記述、現物は不明。
6. 昭和11年県指定「門川町古墳」中の一群であつたが、昭和55年史跡総点検時には消滅していた。
7. 石川恒太郎氏「門川町史」による。
8. 門川神社宮司河野重利氏「門川神社由緒」による。門川神社に伝わる縁起を写したもの。
9. この地方では山の上などにある平坦地を「やら」という。「ごりんがやら」というのは「五輪ヶ平」ということ。
10. 水田 勝氏（門川町史編さん担当者であった）の教示による。
11. この「富田性…」の性は庄の誤りであろう。よって富田性は富田庄である。（門川町史による）
12. 「門川町史」所収。
13. 「吾田土持系図」による。
14. 「日向記」による。
15. 「門川町史」に記述。
16. 石川恒太郎氏「門川町史」による。
17. 「宮崎県史 史料編 中世1」所収、「県史だより第11号1990. 3」所収の「福永祐昌奉安堵状」の解説を参考にした。
18. 「宮崎県史 史料編 中世1」所収
19. 「日向古文書集成」「門川町史」参照
20. 千田嘉博氏（国立歴史民俗博物館助手）の教示によって城跡であることがわかったもの。
21. 「日向記」による。
22. 「門川町史」所収。
23. 法泉寺は文政十二年に火災により記録を焼失したと伝える。現在に伝わる由来はその後口頭を書き記したものを作り写したものようである。
24. 加草在住の請問忠太郎氏の話によると。請問氏の本家に伝わる話として、永願寺（奥院）に、この事件に関係して討たれた主人、妻の墓が元和五年になって建立されたという。現地には元和五年の二月に請問三左右衛門によって建立された板碑が二基ある。
25. 愛宕神社（門川神社）の「諸願控帳」に現われる土持近江守などの土持姓の神官について調べていたところ、五ヶ瀬町の郷土史家西川 功氏より教示を受けた。

II、調査に至る経緯

平成3年3月、江田城跡が道路改良に伴い一部開発されることから内部協議を行なっていたところ、門川城の縄張り調査のため、門川町教育委員会が招へいしていた国立歴史民俗博物館助手の千田嘉博氏が来町されたので、現地へ同行をお願いし、現状を確認していただいた。

工事は、町道加草～枝橋線道路改良事業に伴うものであったが、法面の切りとりに城の一部がかかるというので、千田氏に城の範囲を示す縄張り図の簡単なものを描いてもらい、担当課である建設課と具体的な協議にはいった。

担当課では、江田城の存在についてはよく知っていたが、城の範囲が城の中心と思われる頂上の広い曲輪（くるわ）やそれに続く尾根にある堀切だけだと認識していたことと、また諸事情により工事計画が早まったため所定の手順を経ず一部工事が先行していくた。

江田城跡は、地元加草の住民をはじめとして比較的よく町民に知られている城跡であり、文化庁発行の全国遺跡地図にも掲載されている「周知の遺跡」であることから、教育委員会としてはまず文化財保護法第57条の3第1項の規定にもとづいて「埋蔵文化財発掘通知」を早急に行うよう指導した。

平成3年4月にはいって、宮崎県文化課に城の調査法等についての指導をお願いしたところ、同課の主査北郷泰道氏の来庁をうけ、協議に加わっていただいた。現地で、城の状況をさらに細かく観察しながら協議したが、カットされた曲輪を下から見上げると断面にテラス状に残ったところがあり、「こしげるわ」ではないかとのことだった。事前の協議がなかった事もさることながら、この部分の調査が出来なかつたことが悔まれた。

引き続いて、その後の工事について関係課との協議を重ねたが、道路法線変更ができないことから、造構の性格と城の範囲が充分把握できるような地形測量図を残すため、25cmコンタの $\frac{1}{200}$ 縮尺の地形測量図を作成することとし、道路及び法面にかかる部分については発掘調査を実施することにした。

平成4年8月、地権者との交渉が整ったので、それをうけて発掘調査の準備をすすめ、同年10月に発掘調査にはいった。

III、調査の経過（調査日誌抄）

- 平成4年9月24日 伐開現場で打ち合わせ。9月末までに切り倒した杉を人力で降ろしてもらうことにする。
- 10月19日 快晴。器材搬入。A地区の横堀に直行してトレンチを入れる。
- 10月20日 快晴。グリッド設定。堀の表土剥ぎ。
- 10月21日 快晴。表土剥ぎ。根が張っているため掘りにくい。
- 10月22日 晴れのち雨。平板測量。午前中、日向市教育委員会より2名見学。午後3時ごろより雨がパラつきはじめ、4時30分ごろには本格的となつたので早目に終了。
- 10月23日 雨。午後から会議のため、A地区的作業は中止。B地区的雑草木の撤去を指示。午前10時すぎ、宮崎県文化課の北郷氏来庁、現場に案内、指導を受ける。
- 10月26日 快晴。B地区東側下の五輪塔周辺の平坦地の雑草木の撤去。
- 10月27日 快晴。昨日に引き続き作業を続行。午後に新城の件で徳山曹達と関係課との協議がはいる。
- 10月28日 快晴。C地区の一部が搬入路のため表土を取り、岩砂が敷かれてしまう。C地区も調査範囲であることを業者に説明。
- 10月29日 晴れ。C地区をユンボを使って表土剥ぎ。ピット4コ検出。
- 11月4日 晴れ。B地区の北西側の平坦地（腰ぐるわ？）の表土剥ぎ。C地区的ピットの掘り上げ。
- 11月10日 晴れ。A地区、B地区的精査。
- 11月11日 晴れ。樹白木測量に測量を委託。A地区的堀の平面とコンタをとる。
- 11月12日 晴れ。昨日に引き続き、B地区、C地区、D地区的平板測量を行なう。
- 11月13日 晴れ。委託した測量が終了。B地区的精査。
- 11月16日 晴れ。B地区、平板測量。D地区にトレンチを入れる。
- 11月17日 曇りのち晴れ。A地区、土層セクション実測の準備。B地区、遺物の取り上げ、写真撮影、青磁塊の破片出土。
- 11月18日 晴れ。B地区、丘陵端部の精査。青磁塊の底部出土。ピットが並ぶと思われたので掘り上げる。
- 11月19日 雨のち曇り。雨天の為、作業中止。

- 11月20日 曇りのち雨。雨天の為、作業中止。文化祭運営の為、21日～23日まで作業を休む。
- 11月24日 晴れ。B地区、土塁の平面、断面図実測。新たに青磁碗底部と胴部破片出土。うち胴部1片はNo.5の土塁中。
- 11月25日 晴れ。B地区、土塁配置図作成、土塁の実測、遺物取り上げ。C地区、清掃。
- 11月26日 晴れ。明日の空撮のため全地区の清掃を行っていたが、強風のため、午後は作業中止。石塔移転。
- 11月27日 快晴。㈱スカイサーバイに委託して航空写真撮影を実施。強風の為、難しいようだった。午後3時、予定をかなりオーバーしてようやく終了。
- 11月30日 晴れ。A地区の土層断面図作成を残して、調査終了。後かたづけ
- 12月1日 晴れ。A地区、土層断面図作成。すべての調査作業を終了する。



第2図 発掘調査地点と周辺の地形（昭和47年門川町作成測量図による）

IV、調査の記録

発掘調査の方法は、グリッド法による全面発掘を基本としながら、部分的にトレント法を用いた。また尾根筋や谷ごとにA～Dの4つの地区に分けて作業を行った。はじめにA地区の横堀の断面を観察するため、堀に直交してトレントを掘った。表土は思ったよりもずっと浅く、堀の埋土もすくなかった。谷への流れ込みが著しいためと考えられる。表土（腐葉土）を取り去るとすぐ岩盤にあたった。

B地区～D地区においても同様で遺構の検出は望みが薄かった。

以下、各発掘区ごとに発掘調査の経過と結果を述べる。

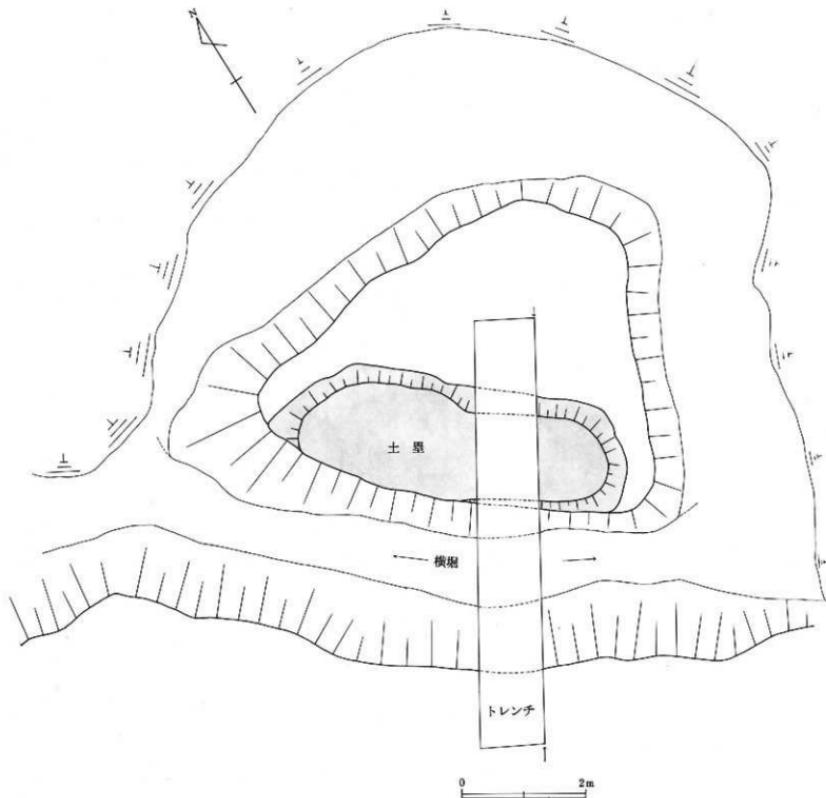
1. A地区（図版3-①～⑤）

今回の発掘調査の主要な遺構は、A地区の横堀と上堀、それに伴う平坦地である。発掘調査前の現地踏査の段階から、堀のおおまかな外形が目で見てよくわかるものであった。平成3年度に作成した25cmコンタの $\frac{1}{200}$ 縮尺の地形測量図にもはっきり表われている。

現場には、枯れた杉枝や葉が一面に落ちていたので、それを取り除いた。次に表土剥ぎをしなければならないが、表土が薄く、急斜面のため作業範囲がせまく、堀りすぎてしまうことが考えられたので、まず堀の断面を出し、その形状を観察することにした。堀のほぼ中央に直交して幅1m、長さ7mのトレントを掘った。掘り下げていくとすぐに堀底に到達してしまい、堀以外の部分は表土からすぐに地山となっていた。遺物は全くなかった。断面の確認ができたので、表土剥ぎにかかった。腐葉土を取り去ると、根がはっており非常に掘りにくかった。上の色は茶褐色でバサバサしており、あまり粘りがなかった。表土中には遺物は含まれていなかった。

①横堀（第3図、図版1-⑤、2）

先にも述べたように埋土がとても浅かったが、堀を切りこんだ地山の観察から、堀を切った際にその岩くずを山側と谷側に盛り、谷側では現状より土を高く積み上げ、その北側に平坦面を設けていたことが推測された。斜面に切り出された平坦地は、昭和30年代に開墾されたというが、城の造営時にこのような施設が存在していたことも考えられる。また堀はもともと浅いもので、あまり長く切っていないだろうとの教示を緒方博文氏（日向市社会教育課）より受けた。もともと急峻な地形なので、堀を長く掘りすぎるとかえって足がかりとなり、防ぎよ性が薄れてしまうことは充分理解できた。北西側の土壘（盛土）は、頂上が標高約23mでこんもりと盛り上がっている。そこからだらだらとやや下りながら平坦地があり、開墾時の急な

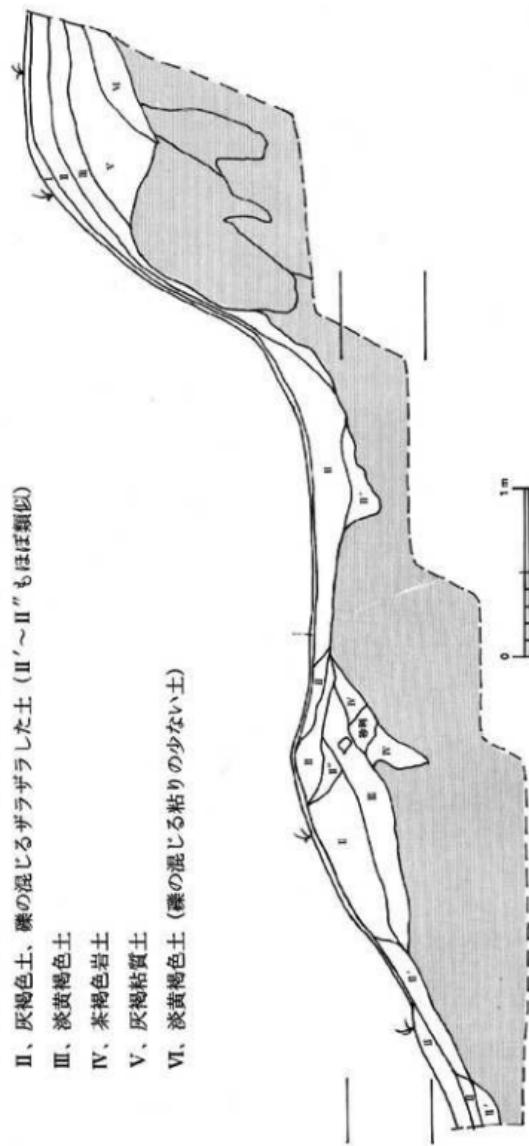


第3図 A地区横堀平面実測図

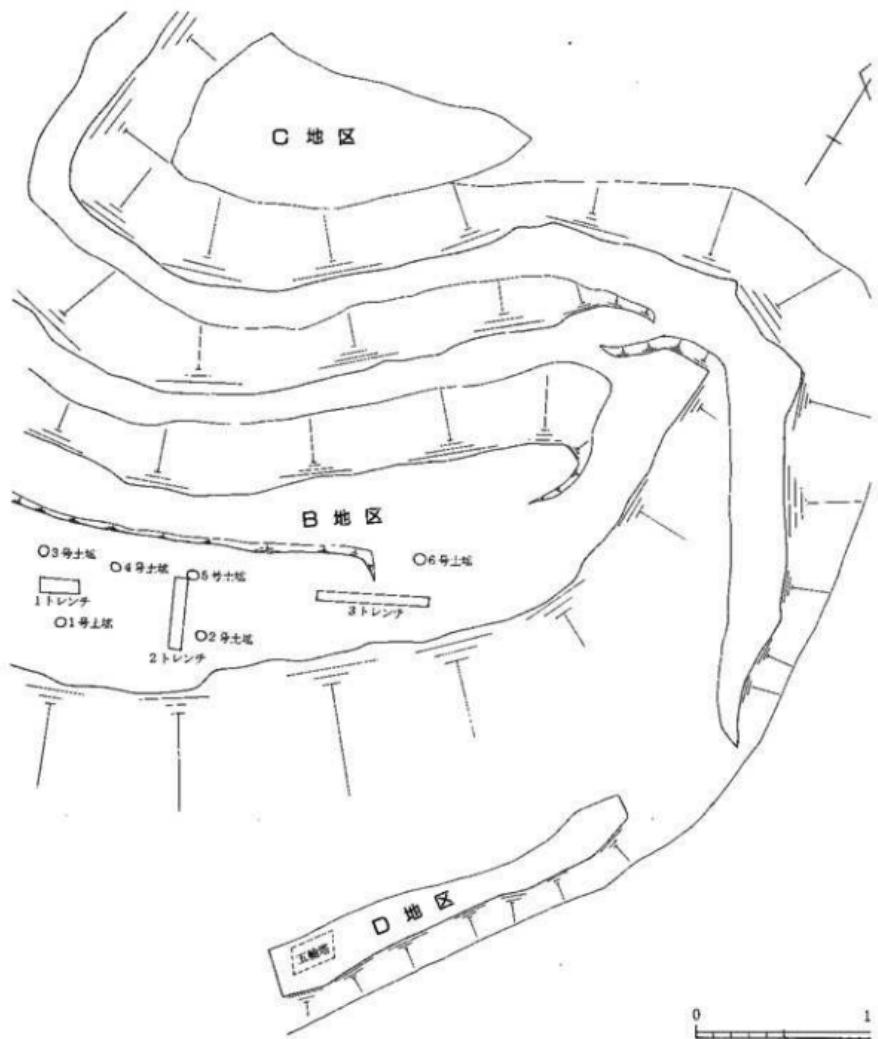
切り込みで段落ちしている。堀の埋土にも遺物は含まれなかつた。

② 土層 (図版 4)

- I、表土 (腐葉土)、ハサハサして粒りの少ない茶褐色土
- II、灰褐色土、葉の混じるザラザラした土 (II' ~ II'' もほぼ類似)
- III、淡黄褐色土
- IV、茶褐色岩土
- V、灰褐色粘土
- VI、淡黄褐色土 (葉の混じる粒りの少ない土)



第4図 横堀土層断面図



第5図 B地区平面実測図

2. B地区（図版1-⑥、3-⑥）

この地区は、やはり昭和30年代後半に重機による大がかりな開墾がされている。こちも表土が薄く、端部の方に土が流れ込み、そのあたりがやや厚くなっているだけだった。ほとんどすぐに地山に達した。しかし何度もけずっているうちに土の色は周囲と変わらないが、非常にやわらかくなり深く掘れてしまう部分があるのに気づき、岩盤に円形に掘り込まれた土塙がいくつかあるのを発見した。はじめは埋土に岩くずを含むので、周囲との区別が難しかったが、見慣れてくるとわかりやすくなった。径50～60cm、深さ40cm程度で一列に並ぶものもあったので、意識的に探してみたが全体的としてつながりは見出せなかった。その埋土は、はじめは茶褐色で岩くずを含むバサバサした土であったのが、粘りをもった黒っぽい土、又は茶褐色土となり、最下底では根がからんだ腐葉土が必ずといってよいほど見られた。また丘陵端部ではゴミ穴だったりし、中央部では木根の掘り痕もかなりあったので、そのような新しい土塙であることも考えられた。用途はわからないが、部分的につながりのありそうな土塙の列があったので、それについて記録をとった。

用途不明の土塙（第6図、図版5、6）

①第1号土塙 径60cm、深さ40cm、平面はほぼ円形で、掘り方は段がなくほとんど直に掘っている。

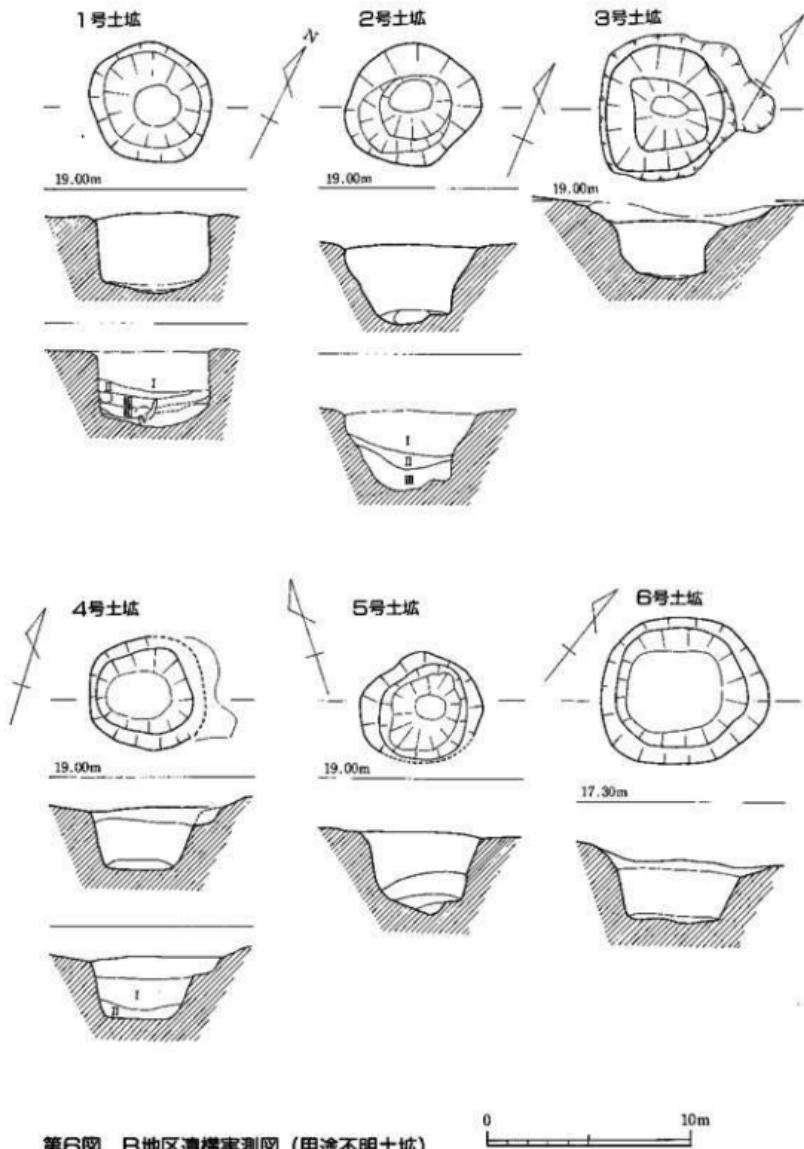
- 土層 I、固くしまった褐色粘質土
- II、腐葉土
- III、ややバサバサした褐色粘質土
- III'、褐色粘質土
- IV、腐葉土

②第2号土塙 径60～65cm、深さ40cm、平面はほぼ円形で、掘り方は、底の方がすぼまってU状になっている。

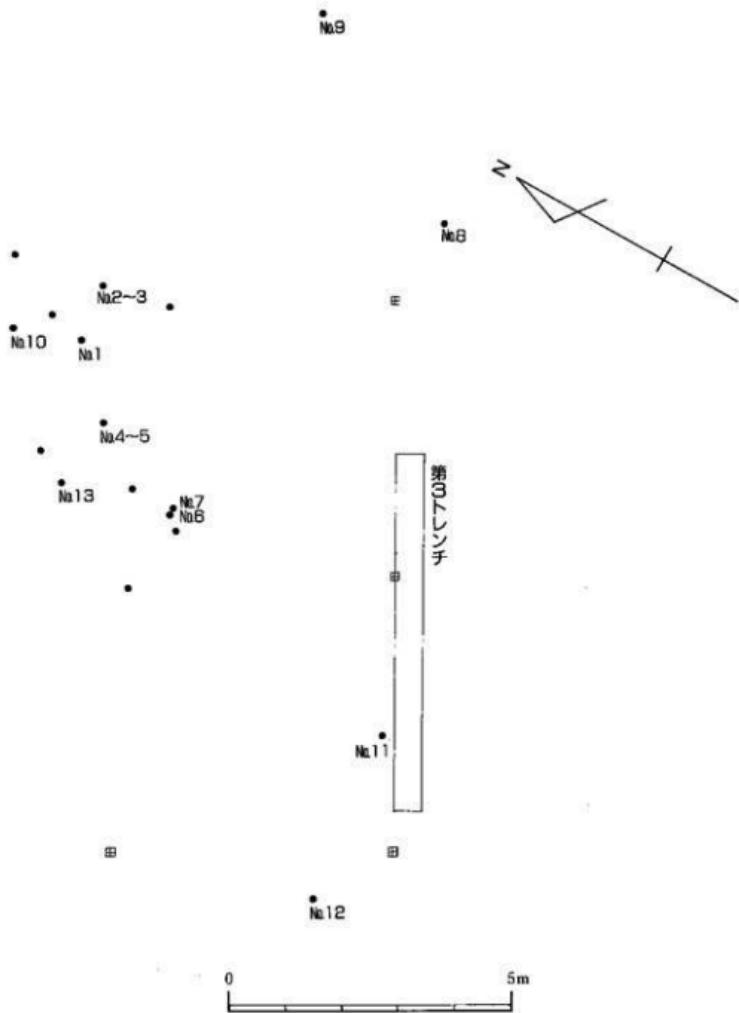
- 土層 I、固くしまった褐色粘質土
- II、腐葉土
- III、黄褐色粘質土（岩くずを含む）

③第3号土塙 径60～70cm、深さ約30cm、木の根の掘り方によって搅乱されているので、平面形、断面形も崩れている。平面はほぼ円形で、掘り方は底の方がすぼまってU状を呈している。

④第4号土塙 径約55cm、深さ30cm、平面はほぼ円形で、掘り方は搅乱のため崩れて



第6図 D地区遺構実測図（用途不明土塁）



第7図　B地区遺物出土状況

いるが、U状を呈している。

土層 I、褐色粘質土

II、暗褐色土（腐葉土）

⑤第5号土塙 径55～60cm、深さ40cm、平面はやや不整な円形で、掘り方は底の方がすぼまり、U状となっている。埋土より青磁碗の破片が一個出土した。

土層 I、褐色粘質土（岩くずを含む）

II、褐色粘質土

III、黄褐色粘質土

IV、腐葉土

V、褐色粘質土（バサバサして、岩くずを含む）

⑥第6号土塙 径70～80cm、深さ30cm、平面はやや梢円形で、掘り方はU状を呈す。
他の土塙に比べ大きい。

3. B地区出土の遺物（第8図、図版7）

当初B地区からは、近世～近代のごく新しい茶碗の破片や瓦破片、すり鉢破片などしか出土しなかったが、調査の後半になって丘陵端部で青磁碗の破片が出土しはじめた。しかし遺構に伴うものではなく、流れ込みの状態の出土であり、ごく少量であった。

①瓦（第8図1～3）

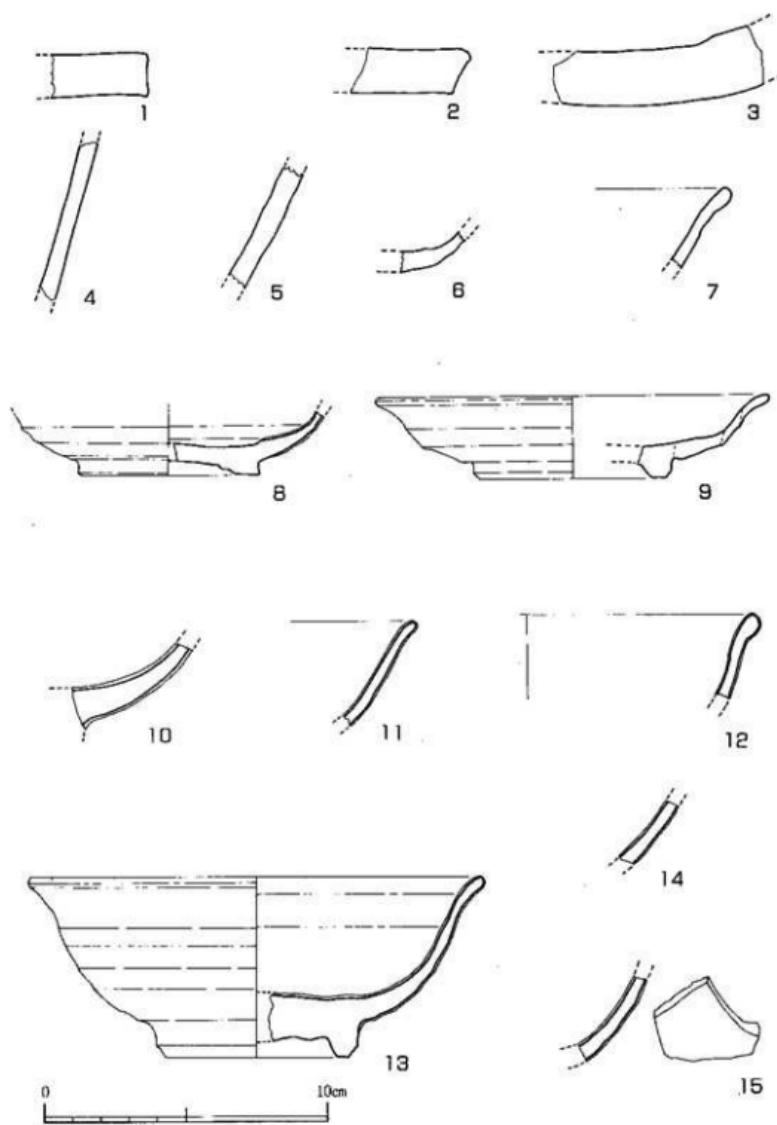
1は、厚さ15mmの平瓦の一部と思われる破片で、文字刻がある。書かれている内容は不明である。色調は褐色を呈す。2は、15.5mmの平瓦の一部と思われる破片、色調は褐色を呈す。3は平瓦の破片で、厚さは20mmである。色調は、1や2に比べてくすんでおり、灰黄褐色を呈す。

②土師質土器（第8図4～5）

4は、土師器破片で、厚さ6.2mm、色調はにぶい橙色をしている。胎土はきめ細かく赤褐色の粒を含む。外面はていねいなナデを施している。5は、内面にすり鉢状のクシ目が施された土師質の土器片、厚さは8.3mmで、色調は明赤褐色を呈す。胎土には細かい砂粒を多く含み、かたくしまった焼成である。

③陶器（第8図6～7）

6は、陶器の破片で、厚さは3.6～6.8mmである。釉薬の色調は灰色を呈し、地色は灰黄褐色を呈する。胎土はきめ細かく、焼成はかたくしまっている。7も陶器の破片で、口縁部である。厚さは4.8～5.25mmで、釉薬の表面に泡立った痕がツツツツになっている。色調はにぶい黄橙色で、地色は灰色を呈する。胎土は精良で、焼成



第8図 B地区出土遺物実測図 (1/2)

は良く、かたくしまっている。

④青磁器（第8図8～15）

8は、底部破片、厚さは3.2～6.0mmで、高台がつき、底部内外をヘラ切り調整している。釉薬には細かな黒い貫入がはいり、表面にブツブツがある。色調は灰オリーブ色を呈し、地色は灰黄色を呈している。焼成は良好で、かたくしまっている。16世紀ごろのものか。

9は、底部へ口縁部が残っている。厚さは3.35～10.13mm、8と同様に高台がつき、内外をヘラ切り調整している。類似の資料だが、同一個体ではなさそうである。釉薬に細かい黒い貫入がはいっている。色調は灰オリーブ色、地色は灰黄色を呈している。焼成は良好でかたくしまっている。同じく16世紀ごろのものと思われる。

10は、底部近くの破片で、厚さは6.3～10.46mmで、ぶ厚く釉薬が施してあり、1.1mmほどある。内外共に大きな貫入がはいっており、表面は整っている。色調は明緑灰色で、地色はにぶい黄色を呈す。胎土は精良で、焼成は良く、かたくしまっている。14～15世紀ごろのものと思われる。

11は、口縁部破片である。厚さは3.9～4.4mmであり、釉薬に少し貫入がはいっている。外面はヘラ調整、内面はナデ、色調は緑灰色で、地色は灰色である。胎土は精良で、焼成は良好である。14～15世紀ごろか。

12は、口縁部破片で、縁が丸く仕上げられている。厚さは5.0～6.6mmで、釉薬には内外面に貫入がはいっている。内外面ともよく整っており、焼成は良好である。釉薬の色調は、緑灰色を呈し、地色は灰オリーブ色である。14～15世紀ごろのものと思われる。

13は、今回出土した遺物の中で最もまとまっており、青磁碗である。約 $\frac{1}{2}$ 残っている。高台がつき、外面ヘラケズリを施し、内面はヨコナデである。釉薬に細かな貫入が見られ、釉薬は高台までかかっている。胎土はやや粗く焼成もややあまい。色調はオリーブ灰色を呈し、地色は底部で浅黄色を呈し、体部で灰黄色を呈す。14～15世紀ごろのものか。

15は、連弁の一部がみられる体部破片で、厚さは5mm、釉薬の表面はブツブツしている。胎土は精良で、焼成は良好である。釉薬の色調は緑灰色で、地色は、灰白色である。13～14世紀ごろのものと思われる。

4. C地区、D地区（図版3-⑦⑧）

A地区とB地区の間の谷をC地区とした。せまい迫田の奥で、みかんや桐などが植

えられていた。最近の茶碗などが表採された。表土を Yunbo でけずつてもらったところ径40cm程のピットが2箇所、検出された。青味を帯びた灰褐色粘質土が埋まっていたが、掘ったところ底からビニール類が出たので、発掘は中止した。他に遺構、遺物は検出しなかった。

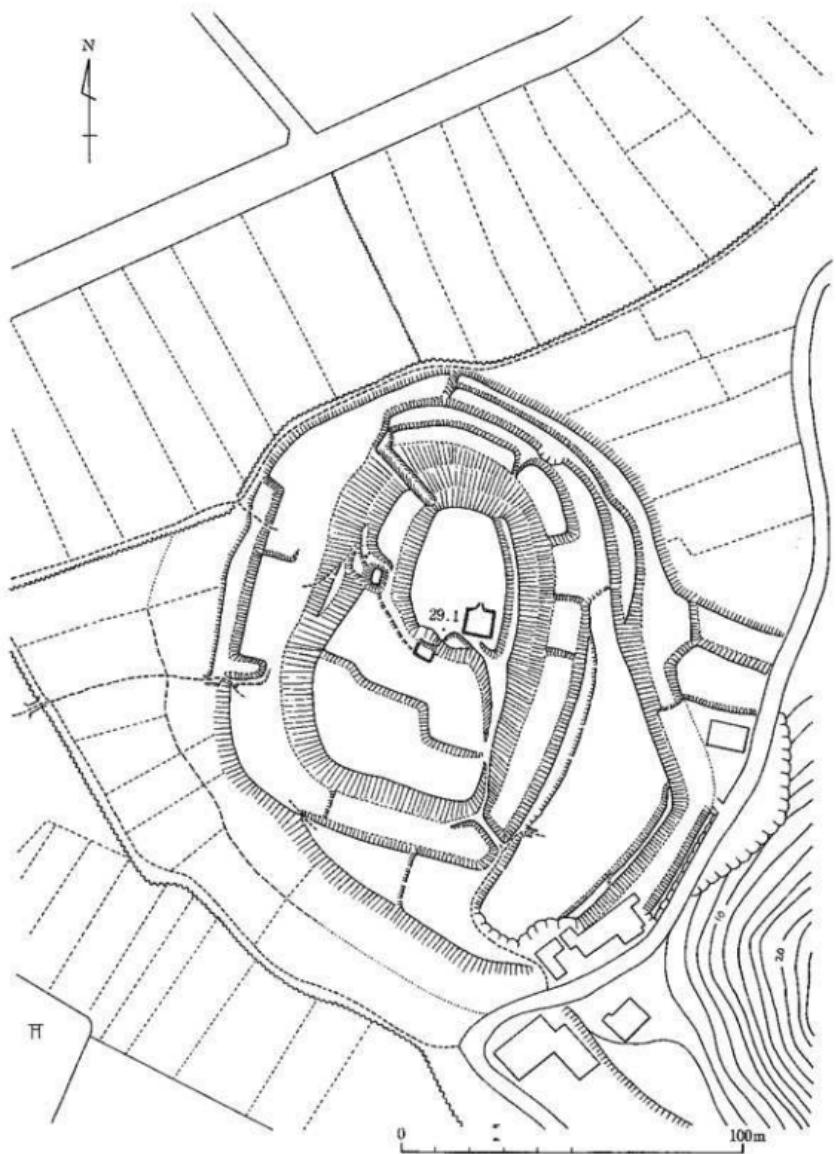
B地区の東側斜面の裾部を切り開いて平坦地をつくり、そこに五輪塔が集められている。五輪塔は、その周辺の田にあったものをまとめたものである。地元の伝承では、西南戦争の時の砲台跡ということである。ここをD地区とした。一部にトレンチを入れ、表土を剥いでもらったが、すぐに岩盤があらわれ、表採品も新しいものばかりであったので、作業を中止した。

5. 小結

A～D地区に共通して、表土が薄く、遺物包含層というものがなかった。すぐに地山に達するので、遺構があるとすれば、岩盤に掘り込まれた形となるが、B地区の土塹にしても、城に伴う遺構とは断定し難いものであった。

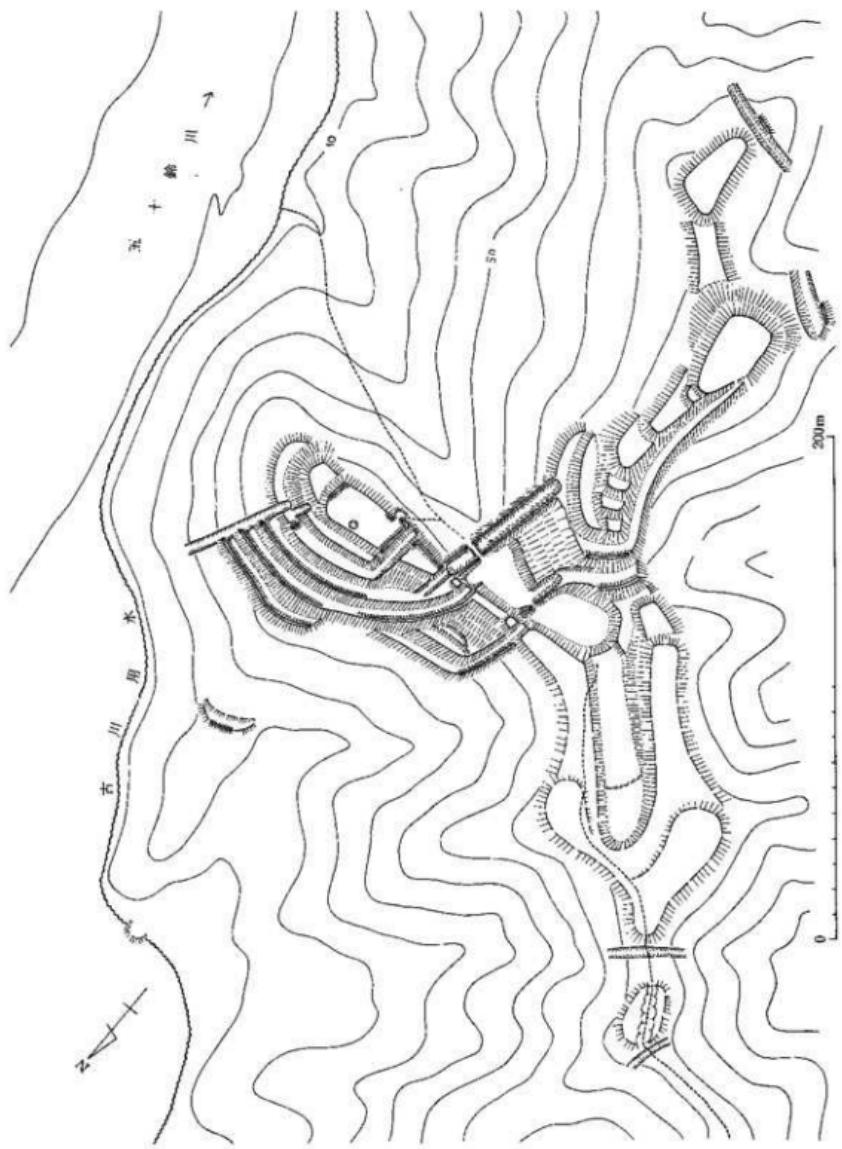
A地区の横堀については、考えていたより浅く、丘陵のつけ根を断ち切っただけのものであった。しかし防ぎよをするためより攻撃のための積極的施設ではなかったかとの指摘もあったので、類例について、今後気をつけてみたいと考える。

城の時期としては、B地区出土の青磁によって16世紀には存在し、機能していたと考えられる。遺物としては流れ込みの状況であったが、完形に近いものもあったので、B地区が開墾される以前には何らかの遺構が存在していたことは充分考えられる。



第9図 門川城縄張り図 (千田嘉博氏作図)

第10図 新城郷張り図 (下川嘉博氏作図)



V、まとめ

江田城跡は、門川町の北部、丘陵地帯の一角に鳴子川と丸山川にはさまれて屹立し、頂上に登れば町内を一望でき、四方をにらむ自然の要害である。今回、調査した横堀は、城の主体部を敵から守るための施設として一般的には位置づけられるが、このような急峻な山にあっては、もっと積極的な機能が指摘された。つまり攻撃のための残ごう的な要素である。あるいは物見的な要素というか。そういったことが、この堀の目的としてあったかも知れない。遺物も発見されず、遺構の構造も細かいところまで把握できなかつたため、今後、城全体の調査によって、あるいは町内の他の多くの城跡、要塞跡の調査によって明らかになっていくことを期待したい。またB地区においては、開墾がすすんでおり、遺物も遺構に伴なっての出土はなかったが13～16世紀に比定される青磁碗破片が見つかり、主体部だけでなく、残された城の大部分（山全体）に未知の遺構、遺物が存在することを示唆するものであった。

門川地方は、中世～近世にかけてのいつの時代においても国境地帯であり、土持氏と伊東氏、伊東氏と島津氏、島津氏と大友氏の領土をめぐる戦いに、常にほんろうされていた。現在、町内に分布している城や今後、発見されてくるであろう城の遺構の研究によって、県北の中世の複雑な勢力分布が明らかになってくるのではないかろうか。

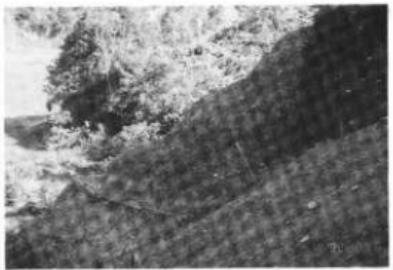
門川町の歴史研究は、延岡市と日向市のはざまにあってとかく見過ごされており、資料も少ないと思われている。今回の発掘によって得た展望を今後の調査に生かし、文化財保護思想の普及、啓もうにつなげていければと考える。

図版

図版1



①江田城全景（南より）



②近景（北西より）



③発掘調査地点全景（北より）



④同（北西上空より）



⑤A地区（横堀）



⑥B地区

図版2

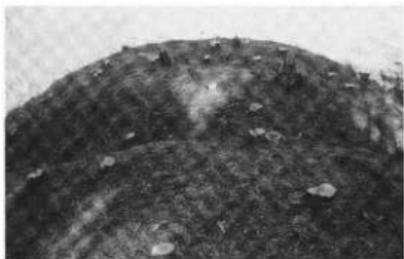


A地区全景（横堀検出状況）

図版3



①A地区発掘前



②同左 近景



③A地区発掘後



④同左 遠景



⑤A地区調査風景



⑥B地区調査風景

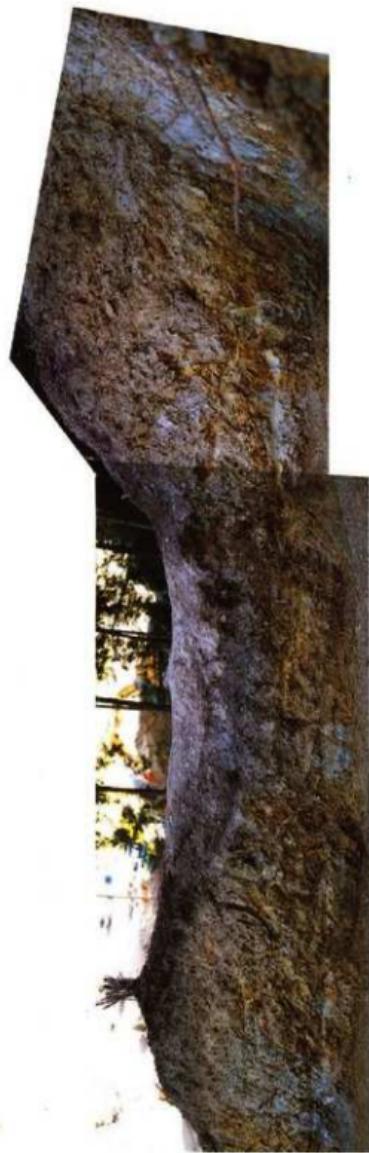


⑦C地区調査風景



⑧D地区石塔群

図版 4



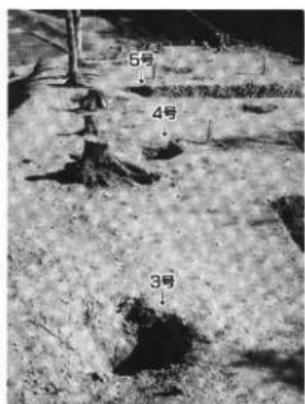
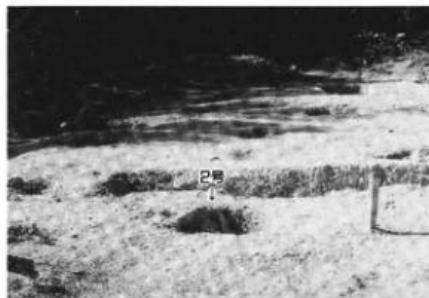
△地区横断面（西から見る）

図版5



B地区全景（用途不明土塙検出状況）

図版 6



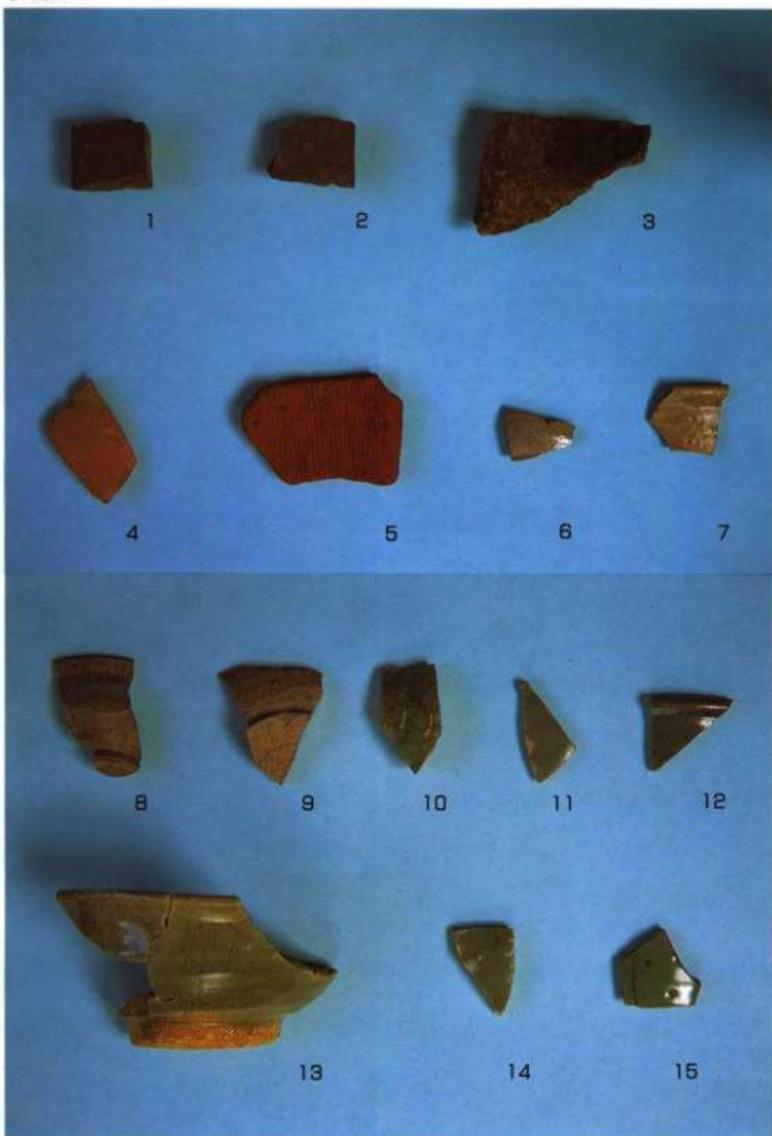
日地区遺構検出状況

図版 7



日地区遺物出土状況

図版8



B地区出土遺物

江田城跡地形図

S=1:200

